
love song -あいのうた-

衣川 蛍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

love song - あいのうた -

【Zコード】

Z0447X

【作者名】

衣川 蛍

【あらすじ】

蘭、じめんな…。 鳥を追う日常の中、それでも小さな思い出ひとつひとつに笑顔があふれていて、とても幸せだった。みんなともっとたくさん思い出を作りたかった。そして、大好きな人とずっと一緒にいたかった…。 名探偵コナン史上最も純粋なラブストーリーが今、始まろうとしている。 感動をいっぱい届けたい。CPは原作重視。 ショッキングな内容が含まれているので15歳以下の方は自己責任でお願いします。

○○（前書き）

初の連載小説です！
ストックを貯めてる状況なので、
とりあえずブログだけの投稿とします！

「コナンくん…元気ですか？そつちは、どんな天気ですか？」

一人の女性が呟いた。

「早いね、もう10年が経つたんだね。あれから、キミはどんな気持ちでいますか？
どんな顔をしているの？」

女性は空を仰いだ。瞳に空を映し、だんだんと潤んでいくその綺麗な瞳から、一粒の涙が落ちた。

「ねえ……、どうしてここにいるの？何を考えて、どんな表情をしてこらなの？」

「今度は一つ、会えるの？」

あとからあとから溢れる涙を、もつまでもう泣かない。

「ねえ、新一……。会いたいよ」

女性は最後にいつ言い残したきつ、もう何も言えなかつた。

そして、彼女の長い一日が始まる。

* * *

少年はいつも自分勝手だった。

自分のことを棚に上げ、他人のことをばかりを気にして、いつも周りばかり守ってきた。

そんな少年に、ある女性が言った一言によって、彼の運命が変わった。

「キミは、どうしてそんなに自分勝手なの? キミが守るべき相手は、他人じやなくて自分だってこと、どうしてわからないの? キミが私たちを守るのならば、誰がキミを守るの? キミは、誰に抱きしめてもらひうの?」

いつ、涙を流すの?

少年は大きく目を見開き、その瞳から誰も見たことがない、彼の魂がこぼれおちた。

いつたん溢れだしたそれは、もう止まることなく流れ続け、あとからあとからボロボロと溢れだす。

それは、彼が初めて人を必要とした瞬間だった。

「「めん、なさい…」

少年は、蚊のなくよくな声で呟いた。そして、彼女の腕につまれ、ゆっくりと瞳を閉じた。

彼女はそっと、でも力強く抱きしめた。両手で、小さな身体を頭を、腕を、優しく包み込んだ。

「もう誰も、貴方を一人にはさせないから。貴方は一人じゃないから。

ずっと、そばにいるから……」

彼女の言葉、ひとつひとつが彼の中で溶けて、浸透していった。そして堅く硬直していた心が、身体が、欲していた安らぎを受け入れ始め、ほぐれしていく。

「…ありがとう」

その言葉と共に、静かに微笑んだ。

〇〇（後書き）

次話はもうしばらくかかりそうです。
1・2週間以内にはストック6話分くらい
貯めるのを目指して頑張りますので、
応援よろしくお願いします（＊、＊、＊）

01(前書き)

今日でストックが3話分出来ました。
プロローグだけっていうのは何だか
寂しい気もするので、
出血大サービスで　おいw
うわしちゃいます (*'▽'*) wwww

「江戸川君、どうかしたの？」

帝探小の教室内で机にうな垂れるメガネの少年を見て、茶髪がかつたウェーブの少女が声をかけた。
江戸川君、と呼ばれたその少年はゆっくつと顔を上げ、細々と答える。

「いや、なんでもねえよ…」

「なんでもないわけないでしょ。何だか疲れているみたいだし」

氣だるやうに答えた少年　いや、コナンに向かつて、まるで奥さんのように鋭くつっこむ少女、哀。

コナンは再びうな垂れ、めんどくわいひへ歸る。

「寝不足なだけだよ…。少しだけ、頭も痛えけど…ほっとせやあぐ治るつて」

「やう。それならこんなとこひで寝ないで、保健室に行くなり帰る

なつしたりびうなの？あの子たちだって心配するじゃない

哀がいう、”あの子たち”は案の定、遠くの方からコナンの様子をじーっと眺めていた。

肩まで伸びたカチューシャの女の子、そばかすのつぼの男の子、そしてぽっちゃりを通り越した体格のガキ大将風の男の子 歩美、光彦、元太だ。

「なんだか、やつれません?」コナンくん…」

「ああ、俺も思つたぜ。少し痩せたよな?アイツ」

「うんうん…大丈夫かなあ、コナンくん…田の下にクマもできるし」

3人はここと集まって話をしていた。そんな3人を見たコナンは苦笑し、立ち上がった。

「おー、おめーら。じゃち来いよ」

コナンに呼ばれていそいそと集まつてくる3人は口々に漏らす。

「やつぱつコナン君、近くで見たらい判だよー。」

「やつですよ、今にも倒れそうじやないですかつー！」

「お前、今日はもう帰った方がいいんじゃないかなーか？」

そんな子供たちの言い分を、今日は素直に聞いてやろうと思つたコナンは、無言でロッカーから自分のランドセルを持ち出し、教科書やら筆箱をしまい始めた。

「ああ、やつするよ。心配かけて悪いな…。んじゃ、バイバイ

そつまこ、ランドセルを背負つたコナンは早々と教室を後にしてしまった。

探偵団はそんな素直すぎるコナンの後ろ姿を、黙つて見送ることしかできず、ぼーっと眺めていた。

* * *

教室から出たコナンは小林先生に早退する旨を伝えたあと、校舎を後にした。

「あー痛え……なんなんだよこの頭痛は……だりー」

コナンはぼやき、右手でこめかみを押さえた。
ガンガンとした痛みと共に加えて耳鳴りもし始めた、この感覚。
コナン自身、少し戸惑っていた。

探偵事務所までの距離が、普段よりずいぶんと長く感じる。一瞬、視界がぶれた気がしたコナンは、壁に手をついた。

「…え、ちょ、何だ？」の感じ…」

得体のしれない感覚に耐え切れず、その場にしゃがみこんだ。
体育座りをして足の間に頭を埋めこみ、だんだんひどくなる頭痛に
顔をしかめる。

途端に今度は胸の奥から何かがこみ上げてくるような変な感覚がし
て、食道が熱く、思わず口を押さえた。

「うう…く」

ぐわんぐわんとした眩暈と、突然の吐き気に動搖しまくったコナン
は、しばらくの間その場から動くことができなかつた。

01（後書き）

さて、コナン君はじつはなつてしまひこんでしようかねえ（* 。 。 * ）
べへへ w

すこません… w

…私は本当に鬼だなつてひへり黙ってしまいます（笑）

この後の話はまた近々うわしますので、
気長にお待ちくださいな（* 、 、 * ）

ではでは～（*へへ*）へシ

02 (前書き)

さて、2話目の投稿です (*、*、*)
場面が変わり、小学校の彼らの登場ですよ。
お楽しみに。

「コナン君、大丈夫でしょうかね。一人で帰らせてしましたけど…」

教室では残された探偵団が輪になつて会議をしていた。その中で中心になつた哀は何やら真剣な表情で腕を組み、考え事をしていた。光彦はコナンを一人で帰らせたことを少し後悔しているようで、思わず呟いた。

「そうね…彼、今日はやけに素直だつたしね。最近、顔色も優れな
いし、何かあつたのかしら」

「アーッ、一昨日ぐらいいから調子悪そつだよな！」

「そうそうー昨日なんて大好きなサッカーだったのに見学してたし
…。歩美、心配で次の授業集中できないよ」

元太と光彦も歩美と同じことを考えていたようで、首をぶんぶんと
縦に振った。

「そうなの？私、昨日は休んでいたから……江戸川君、どんな様子だつた？」

哀は昨日、博士が腰を痛めたため看病をしなくてはならなかつたので学校を休んでいた。サッカーが大好きなコナンが見学をするほど体調を壊していたことなど、知るよしもなかつた。

「えっとね……体育が始まる前の着替え時間に、すごい顔色が悪くなつたんだよ。ね？元太君」

「ああ。んで俺、アイツに声掛けたんだけどよ、真っ青な顔で大丈夫とか言つから、保健室に無理矢理連れてつたんだ」

「そうそう。コナン君、抵抗もできないくらいに体調が悪かつたみたいで、今日みたいに素直に連行されてたんで僕、びっくりしました！」

昨日の様子を事細かに哀に伝える探偵団の3人。哀はその様子を頭の中でイメージする。そんなコナンなんて想像もつかないし、何か嫌な予感がした。

哀はその予感を確かめるため、勢いよく立ちあがつた。

「ねえ、私も今日は早退するわ」

「ええーーじゃあ俺たちも行くぜー！」

案の定元太たちも同じように立ち上がる。
哀はそんな3人を諭すように言葉を選んだ。

「貴方達はこのままここにいなさい。少年探偵団が揃つて早退だなんて、小林先生がさせてくれるわけないでしょ？私が江戸川君をちゃんと病院まで連れて行くから、ここは私に任せて。お願い」

哀の真剣な頼みに3人は頷くことしかできなかつた。

ロッカーからランドセルを持ち出した哀はコナンと同じように教室を出て校舎を後にした。

＊＊＊

哀は探偵事務所の方向へ走り出す。

と、電柱の陰に小さな人影が見えた。その陰は間違いなくコナンだった。彼は小さい身体を丸めて、少しも動こうとしなかつた。

「工藤君つーーー！」

哀は「ナンの元に素早く寄り添い、背中をさすつた。 ナンはゆっくつと顔を上に向け、哀を見つめた。

「灰原…おめー、学校はどうしたんだよ…」つづ

上を向いたときに、また景色が揺れて吐き気が伴つたらしい。 ナンはまた俯き、顔をしかめる。

「嫌な予感がしたのよ。帰る途中で死んでたらビックリよつてね。」

哀はふつと笑う。 ナンはその不気味さに苦笑しながら、

「人を勝手に殺すなよ…、つたく」

と呟いた。

「とりあえず、博士ん家に行くわよ。貴方の身体、徹底的に調べな
や」

コナンは一瞬ぎょっとしたが、対抗できるほどの体力がなかつたため仕方なく従つことにした。

数分後、少し落ち着きを取り戻したコナンはゆっくりと立ち上がり、歩き出した。

「大丈夫なの？ねえ、いつからそんな体調なの？」

哀は珍しくコナンを気遣つ。

「わらい……博士ん家着いたら話すから。今はちょっと……」

「コナンはそう言い、黙り込んでしまった。

話すとまた自分の声が頭に響き、気持ち悪くなつてしまつたため、今は極力話したくなかつたらしい。

哀はそんなコナンの様子に少し不安になつたが、いずれにしても博士の家に着かない限りどうしようもないことなので、コナンの歩み

にわざてゅうじと歩を進めた。

02 (後書き)

「ナンと娘のコノビージーですよね。
書いて楽しいです（笑）
原作中の2人は
見た目完璧に夫婦ですwww
では次回もどうぞ、お楽しみ

03 (前書き)

小説つて難しいですね；
会話はなんとか書けるんですが、
会話と会話の間の、情景を表現するのが
特に難しい><
でも頑張りますよっ（笑）

「博士、ただいまー」

いつもより大幅にかかつた博士の家までの道のり。博士はずいぶんと早かつた哀の帰りと、一緒にいるコナンの様子に驚き、ばたばたと走ってきた。

「あ、哀君ーなんでこんなに早いんじゃ。それに新一つ…どうしたんじや…顔が真っ青じゃぞ！」

博士は、「とりあえず上がりなさい」と2人を家に入れ、真っ先にコナンを抱き上げた。
ソファに横にならせ、タオルケットをかぶせる。

コナンは博士の手際の良さに少し驚いたが、大人しくソファに身体

を預けた。

そして、そのままゆっくつと皿をつぶり、眠った。

哀はそんな「ナンの浪漫な動きに不安が募る思いがした。

* * *

「哀君…、新一は風邪でもひいたのかのお

博士は眠っている「ナンを見つめながら呟いた。

哀はコーヒーを飲みながら「ナンが目覚めるのを待っている。

「いいえ。」Jの症状は風邪じゃない。きっと何か隠しているはずだ
わ。起きたら白状させなきゃ」

「だが哀君……ほじほじにするんじゃね。あまり追って詰めると悪化
するかもしねえし……」

博士は哀の気迫に少々戸惑い、苦笑いした。

哀はその博士の気持ちを察したのか、同じような表情で答へる。

「ええ。彼の体調も見ながら、ゆっくり聞くつもつよ。」Jのもやも
やが晴れるまで、無茶はさせられないしね」

そして、言い終わると同時に哀の顔の色が変わった。
それは、何かを決意した証だつた。

* * *

外は赤みがかっていた。とっくに学校も終わっている時刻。哀は携帯の電話帳を開き、毛利探偵事務所の番号を探す。表示された番号に電話をかけ、数回のコール音の末、元気な女性の声が聞こえてきた。

「はい、毛利探偵事務所です」

この声を聞くと、なぜだか泣きたくなる。彼女と話すと、どうしても姉のことを思い出してしまう、切なくて胸が苦しくなる。だが、今はこの彼女に伝えなくてはならないことがある。

「あの、灰原哀です」

電話の向こうにいる彼女は、かけてきた相手の意外さに思わずテンションが上がったようで。

「哀ちゃん…どうしたの？あ、コナン君なら、まだ帰っていないんだけど…」

「あ、いや。江戸川君、ちよつとしまじり博士の家に泊まるから、その連絡を蘭さんにしておいたかった。じゃあそつこいつ」とだか、

一刻も早くこの電話を切りたかった。これ以上、彼女の声を聞きたくない。

「あ、待って哀ちゃん。コナン君に代わってくれるへん。

「『』めんなさい。彼、今博士の作ったゲームに集中して……出れる状況じゃないの」

哀は用意していた料白と淡々と言つ。蘭は盛大な溜め息をついていた。

「まつたくもう……じゃあいいわ。哀ちゃん、コナン君に、『ゲームにハマるのはいいけど、ほどほどにしなきよー』って伝えていてくれる？あ、それから、明日は帰つてくるよつて言つてね！それじゃあ

蘭は哀に無難な伝言を任せたあと電話を切った。

哀は軽く息を吐き、受話器を置いた。コナンの様子を見よつとソファに駆け寄ると、思わず息をのんだ。

コナンの寝顔が、あまりにも可愛かつたから。

哀の頬がほんのりと朱色に染まった。可愛いだなんて思った自分の気持ちを必死にごまかすため、哀は地下室へと走る。
博士はそんな哀の様子を見て、頬を緩め、ふつと笑った。

03 (後書き)

今回は少し短くなつてしましました><
ではまた次話で

04 (繪畫部)

今日は蘭ちゃんが登場します
お楽しみに(*、*、*)

「ん…」

あれから約2時間が経ち、コナンはいつの間にかソファから寝室のベッドへと移動させられていた。

目が覚めて、一瞬どこにいるのか分からなかつたが、周りを見渡すと幼いときの自分とまだ黒々としたふさふさの髪が生えている若い博士とのツーショット写真が視界に入り、ここがどこだか気付いた。そして次に気になったのは現在の時刻。身体をゆっくりと起こし、時計を見る。

「え、19時37分つて…。俺、いつから寝てたっけ？」

けれど、久しぶりに一度も夢を見ないまま起きあがくことができた。頭もすっきりしている。

布団をめくつ、ゆくゆくと立ちあがつた。

「…ふう」

少しフラついたが、眠る前と比べたら今の方が断然調子がいい。そのまま寝室から出て、博士と哀のもとへ向かつた。

「博士、灰原…」

リビングへ行くと、そこにはテレビを見る2人の姿があつた。

「新一！」

「工藤君…」

2人は揃つて駆け寄り、コナンの身体を気遣つた。

「とりあえず、座りなさい。コーヒーでいいかしら？」

「ああ、さんきゅ…」

哀は何も言わず台所へコーヒーを取りに向かい、コナンはソファに腰掛け、またも体育座りをし頭を膝の上に乗せた。

そんな様子を見た博士は心配になり声をかける。

「新一、大丈夫か？ 座つてするのが辛いなら横になつてもいいんじやよ」

「ん。大丈夫…寝起きだから眠いだけだよ」

そこへカシップを持った哀が鋭くつつこみながらコナンにコーヒーを手渡した。

「博士の言つ通りよ。辛にならずつと寝ていなさい。はい」

「さんきゅ。でもそういうわけにはいかねーんだよ」

コナンはコーヒーを一口くち飲んだ。哀が淹れるコーヒーはいつも美味しい。コナンと哀は完全なるブラック派だ。

「ねえ、今だいぶ落ち着いているようだから聞いてもいいわよね？」

哀がコナンを鋭く見据えて言った。

「ああ」

コナンの返事を合図に哀の診断が始まった。

* * *

所変わつて、ここは毛利探偵事務所。

蘭は哀からの電話を切つたあと、探偵で父親の毛利小五郎に向かつて説教をしているところだ。

「お父さんっ！いい加減にしてよねっ！」

「つだーうせえなー。いじじゃねーか、もう一本ぐりー…」

「良くないわよー。どれだけ飲めば気が済むのよ…。だいたいお父さんはねー！」

説教を受けている小五郎の周りにはビールの缶と焼酎の瓶が転がっている。人探しの依頼で動きまくった小五郎は風呂上がりにビールを飲んでから約2時間、ずっと飲みっぱなしだった。腹になにも入れぬまま飲んだことを心配に思った蘭は、酒を取り上げ、こうして説教をしている。

「せめて何か食べてから飲みなさいっていつも言つてゐるでしょー。悪いしても知らないんだからね！」

「んもあ、蘭ちゃん怖あーー！」

蘭のこめかみから血管が膨張したような、何かが切れたような、すごい音がなった。小五郎はようやく今の自分におかれている状況に気づき、その途端酔いがまわり火照っていた顔面からは血がひけ、だんだん青くなつていく。

「ら、蘭！ いい、いい今は冗談だぞ！ わ、分かった、今日はこれでやめておくから……ね、だから……あれだけはよせっ！」

蘭は、拳を震わせ、腹の奥から氣合と苛立ちを込めた太い声を出している。

そして、「まあっ！」という掛け声と共に、蘭の足が小五郎の顔面ギリギリのところまで止まった。

小五郎は全身から汗がとめどなく噴出しているのを感じながら、それでもしばらくは動けずにいた。

「…わかつたならさつと片付けてよね

蘭は黒いオーラを発しながら小五郎に静かに言い放つ。

「はひつ…わかりました」

小五郎は口が回らず、何を言つてるか分からなかつたが、蘭からようやく解放されて身体の力が抜けて、その場に崩れた。

その後、何事もなかつたかのように台所に立つ蘭の顔は、日頃の鬱

憤が晴れたのか少し明るくなっていた。

04（後書き）

いかがでしたか？蘭ちゃんと小五郎の絡みも個人的に大好きです　ｗｗ
では次回もお楽しみに（＊、＊、＊）

05 (前書き)

今回のコナンくんは結構素直です w
ちょっとだけ悪化させちゃつたりもして... w

「えつと…」

コナンは哀に言われてここに最近の体調について話している。
哀の隣には博士がパソコンでコナンのカルテらしきものを作っている。

「田谷君たちが昨日、貴方がサッカーを見学していたって言つてた
けど、その辺りはどう? 本当なの?」

知られたくないなつたよつて、コナンは一瞬顔をひきつらせた。

「あ、ああ…。あんときはなんか眩暈がして、周りの声が聞こえなくなつてよ…。元太の声がなんとなく聞こえた気がするけど、あのときの記憶は曖昧なんだ」

「そひ…。体調が悪くなつたのはいつ頃からなの？」

段々細かく聞いてくる灰原を若干苦虫をつぶしたような顔で見つめるコナン。だが哀の真剣な表情を見て、こいつには隠さず全て話をう、と決めた。

「先々週の日曜から」

「それで？最初はどんな症状だつたわけ？」

「頭痛だよ。こめかみのこの辺りが痛み出して…。最初は寝不足か何かだと思って得に気にはしてなかつた」

哀は足と腕を組みなおす。

「…頭痛の痛み方とか、毎回同じだつたりしない？」

「コナンは思い当たるのか、一瞬はつとしたような表情になり、哀は

それに気がつく。

「その顔…、思い当たるのね。どんな痛みなの？」

「なんかこう…内側から押されてるような。最初、頭痛が始まると
きに1回ズキッてのが来て、そつからはガンガン何かで殴られてる
みたいな感じ。それが1時間くらい続く」

哀はその痛みを想像して顔をしかめた。

「キツイわね。それで?頭痛の他に何か違う症状はないの?」

「ナンは少し俯く。

「どうしたの?」

哀は急に黙り込んだコナンを下から覗きこみ、表情を確認しようとしました。

「ん…なんでもねえ。違つ症状だよな…ああ、あるよ」

コナンは軽くこめかみを押さえている。またあの頭痛が始まっているようだ。哀はそのシグナルに気づき、質問をやめた。

「…続ければまた明日聞くわ。頭、痛むんでしょ？少し休みなさい」

「…あ、ああ。悪いな…さんぎゅ」

コナンは痛みで目を堅くつぶる。
横になつたとたん、両手で頭を抱えだし、そのまま動かなくなつた。

「工藤君？大丈夫？」

「……ひ。だ、だいじょぶ…すぐ落ち着くから…。つべ…」

相当痛いらしく、言葉も途切れ途切れになる。
すると、今度は胸を押された。

「工藤君…しつかりして…胸が痛いの…?」

「…これも…すぐ落ち、落ち着く…くあつ」

哀は何も出来ず、ただただコナンのこの“発作”とも言える症状が
おさまるのをひたすら待つことにした。

* * *

発作が起きてから約10分後。

コナンはだいぶ落ち着いているようで、こめかみはまだ押さえているが途切れ途切れだった言葉も正常に戻り、ただ息をするのが少し困難なのか肩を上下に揺らしながら呼吸をしている。

「上藤君、さつき胸の痛みもすぐ落ち着くって言つたわよね？さつさつおうとしてた症状って、この胸の痛みのこと？」

コナンは片目を薄く開き、哀を見つめる。
そして小さな声で話し始めた。

「胸の痛みは……、一昨日からだよ……。夜……、頭痛に耐えてたら寝たあとに布団の中で……。あと、5日前の夜は、熱が出て……」

「ナンは思いで出せただけの症状を話した。哀の顔はどんどん険しくなっていく。

「熱も出たのー?」

「ああ……。蘭たちにはバレてないけどな

そつ言つて悪戯っぽい笑顔を見せた。

哀は呆れて鼻で笑う。

「わかったわ。とりあえず、今日はもう寝なさい。あと、貴方氣づいてないでしきよ。今もたぶん熱があるはずよ。頭痛もおそれくその発熱が原因ね」

「ナンは自分の額を触つて確認する。たしかに少し熱い気がした。

「情けねえー……」

「何言つてゐる。体調不良なんて誰にも起ることよ。博士、寝支度するの手伝つてあげてくれる?」

「ああ。構わんよ。ほれ新一、パジャマ持つてきただが

博士が手こししているパジャマはコナンが幼少の頃、博士の家に泊まる際に来ていたパジャマだった。ベースは水色で、白の水玉模様のシンプルなデザイン。

コナンは博士に付き添われて着替えをし、ベッドに静かに横たわり、数分もしないうちに眠りについたのであった。

* * *

一方その頃、某廃墟ビルの倉庫では怪しげな黒服に身を包む2人の男がいた。

「…アニキ、ボスから例の工藤つてガキの情報が入りやした。アニキの読み通りでしたよ」

「フン…、やはり例の東京タワーの鼠か。ウォッカ、気にするな。奴は近いうちにくたばる。組織が手を下すまでもない…。」

黒いサングラスで太め体系の男と銀髪長身の男。

ジン、ウォッカ。

ウォッカはジンの言つている言葉の意味がよく分からなかつたのか首をかしげる。

「あ、アーニー、くたばるつて… ビリコリ」とですかい?」

「黙れ、ウォッカ。そのうち説明してやる」

ジンはそう言いつと愛車のポルシェ356Aに乗り込んだ。

「フン…だが、鼠の近くに思わぬ產物がくつついでいるとはな

口角を持ち上げ、不気味な笑みを浮かべる。

ウォッカもジンの後に続き車に乗り込むと、ジンは勢いよくアクセルを踏んだ。

「歓迎するぜ、ショリー…」

黒い2人の鳥を乗せたポルシェは、米花町へと向かつた。

05 (後書き)

あああーついに組織が！

さて今後の展開はどうなるのかな？（笑）

最近感想とかメッセとかいただくことが増えたので
そのたびに舞い上がっている作者www
やつぱりこういう喜びが

執筆意欲を高めますね（*、 *、 *）

今後ともよろしくお願ひいたします

06 (前書き)

医療については少し知識があるので
ちょっとだけ入れてみました（笑）
ということは？ w
どうぞ、お楽しみください。（*、*、*）

次の日の朝。

コナンは博士や辰よりも先に目を覚ました。

だが昨日の発熱がまだ続いているのか、頭が重く起き上がるには少し時間がかかると判断したコナンはまちばら横になつておこうとした。

「熱いな…なんかクラクラするし…」

頭や身体が熱く、目を開けると景色が揺れるつえに一重に見えた。発熱しているのに起きているせいか、目覚めた時よりも熱が上がっている気がした。コナンは氣だるそうに布団をめくつ、ゆくつと起き上がり体温計を探しに部屋を出た。

コナンの額から汗が滴り、頬は赤く紅潮し、田は虚ろで肩を上下に揺らしハウハウと苦しそうに呼吸をしている。

「やば…息が」

コナンは一瞬気管が狭まつた気がして、その場にしゃがみこんだ。と、そのとき哀が起きてきてコナンに気づき、慌てて駆け寄る。

「工藤くんっ！…苦しいのーー？」

田を堅く睨り、肺をおもえてハウハウと荒い呼吸を繰り返すコナン。哀は彼の額に触れてみた。

「す、」い熱じやない！」

「…つぐ、つふ…ゲホッゲホッ！…げつ…ふ

哀が額に触れた瞬間、突然苦しそうに咳き込むコナン。喉の奥に何かがひつかかったときのように、必死にそれを排出するように噎せ返る。

途中咳のし過ぎで嗚咽が漏れ、気管支からは呼吸をするたびに、痰が行ったり来たりするように、「ロロロロ、ガラガラ」とあり得ない音が鳴る。

「ゲホッゴホゴホッ！…はあっ、はあっ…」

「工藤くん…痰がまだ残っているから、なるべく大きく息をして。嗚咽が漏れてもいいから、たくさん咳をして痰を出して頂戴。全部

出れなことまた呼吸困難になるわよ

哀はコナンの背中を叩きながら耳元でささやく。コナンはそれに応えるように大きく息を吸い込んだ。その際に残っていた痰がまた気管を刺激して激しく咳き込む。

* * *

しばらくの間、この動作を繰り返し、コナンがやっと落ち着きを取り戻したのは約10分経つてからだった。

哀によつて強制的にベッドへと戻されたコナンは布団の中で縮こま

つていた。

「熱、どうぐらーにあつた…？」

数分前に体温計が鳴ったのだが、その時はまだ声が出せなくて聞けなかつたから今再度哀に確認するコナン。哀は冷たい水に浸したタオルを絞り、コナンの額に乗せながら答える。

「39・8度。どう考へても異常よ。それにさつきの咳だつて…一步間違えれば貴方、窒息死してたところよ」

「あ、ああ…。あ、あれは俺もさすがに死ぬかと思つた。咳は初めての症状だしな。今も少し息苦しいし…」

そう言つてからコナンは胸をおたえてゆっくりと息を吸つた。まだほんの少し氣管からぜいぜいといつた音が鳴つているようだ哀は顔をしかめる。

「まだ奥の方に残っているのね。気持ち悪いのなら取つてあげるけど…」

哀は長くて細いチュークのよつなものを取り出し、コナンに見せた。医療の現場で使われる、カテーテルといったものだ。

「コナンはさうとして首を横にぶんぶんと振る。

「そこままでしなくていい…吸引のこと言つてるんだろ？自力で取れるから大丈夫…」

哀は必死なコナンを見て鼻で笑う。

「クスッ…わかってるわよ。意識のある貴方にそんなことはしないわ。第一、資格のない私が吸引なんて医療行為をしたら犯罪になるでしょ？」

「…なつ、おまつ…わかつて言つたな。病人で遊ぶとか卑怯だぞ

そつ言つて数回咳き込むとジト目で哀を見つめた。

「悪かつたわね。まあ顔色も少しばらくなってきたみたいだからもう少しだけ寝て、次起きたら何かお腹に優しい物でも食べさせてあげる。とりあえず、今は熱が高いからさつさと寝なさい」

哀はそつ言つて放つとそそくさと部屋を出た。

「…相変わらずかわいくねー女」

哀が出て行ったあと、コナンはそつ咳き、再び眠った。

* * *

「おかしい。絶対に何かがおかしい……」

部屋から出た哀は地下室のパソコンでアポトキシンの成分について思い出せる範囲で調べていた。

明らかにコナンの様子がおかしい。「冗談で吸引の話をしたが、あながち冗談では済ますことが出来なくなる日が来るかもしれないのだ。

コナンの体調は日に日に悪化してきている。話を聞くと、頭痛から始まり、その症状は日々重くなっていることがわかる。

頭痛、眩暈、吐き気、発熱ときて、先ほどのあの激しい咳き込みと喘鳴、呼吸困難、そして高熱。ただの風邪でこんな症状は見たことがなかった。

まさかとは思い、いや信じたくないこんな考えがよぎった哀自身も恐怖で先ほどからキーボードに触れる指先が小刻みに震えているのだが、その考えについて間違っていることを信じ、確認作業中のである。

「私たちって…普通なら死んでいるのよね」

それまで黙つて動かしていた指をいきなり止めて、ポツリとつぶやく。そして口元に切なげな笑みをつかべる哀。

「だとしてもこんなの…あんまりよ。彼は、関係のない人間なのに…」

そして、哀の目から光るもののが溢れた。

「罰を受けるべく人間は…私一人で十分じゃない…っ」

一粒だった光が、次々とこぼれては落ちていく。

「……」めんなさい、工藤くんっ……」

耐え切れず、その場にしゃがみ込んで、掌で瞳を覆つ。哀。指の間から涙が溢れて、床に染みを作っていた。

06 (後書き)

哀ちゃん切なすぎます。

作者も片思い中なので、気持ち痛いほど分かります（笑）

では次回もお楽しみに（*、*、*）

前回、哀ちゃんが泣いていた理由を明かします。

哀が導き出した答え。それは、”APTX4869の毒の作用が今更身体に周り出し、結果として様々な体調の異常を引き起こす。”

副作用という形で。

そもそもアポトキシンを服用した者は飲んだその直後に死亡するのがほとんどだが、コナンや哀のように稀に幼児化という代償を残しはするが、生き長らえることが出来る事例もある。だが、元々はヒトを死亡させることの出来る猛毒であるアポトキシン。幼児化という代償だけでなく、後からちゃんと副作用として症状が徐々に現れることが明らかになつた。

そして、その副作用が現れた人間の末路、それは死のみである。

* * *

哀は全身が氷のよつに冷たくなつていいく感覚に襲われている。寒くて寒くて、勝手に震える身体を必死に抱きしめた。

「「あんなもー…」めんなわー…」

壊れたロボットのよつに向て何度も同じ言葉をつぶやく哀。

哀がこの結論に達するにはそれほど難しことではなかつた。副作用じゃないといつ証拠を探していたら、自然といつなつてしまつたから。

そう、証拠なんてじこにもなかつた。探せば探すほど、アポトキシンの脅威がコナンの体調悪化に関係があるといつ事実だけがどんどん浮き彫りにされて、残つたのは、最も恐れる最悪な結果。

「上藤くんを死なせるわけにはいかない…。彼を助けなきや…」

再び立ち上がつた哀はパソコンに向かひた。

この瞬間から、哀の愛する人を助けるための研究が始まつたのだった。

* * *

その頃、「ナニは！」の田一度田の睡眠から目覚めたといひだつた。

「ん…あ、息できてる」

コナンは眠る前の息苦しさから解放されているのを確認すると自然に笑みがこぼれていた。熱も下がり、今のところ頭痛もない。胸の痛みも、気管の違和感も感じられなかつた。

いたつて健康な体に戻った。

コナンはもう思い、ベッドから降りてリビングへと向かった。

リビングには博士がテレビを見ながらくつろぐ姿があった。コナンは博士に近づき、ソファに座る。

「おお、新一。気分はどうじや？」

「ああ、だいぶいいよ。博士、今日はいったん探偵事務所に戻るわ」

コナンはもう言つて、荷物を抱え玄関の方へと歩いていく。博士はそれを慌てて止めようとした。

「だ、だめじやよ、新一っ！まだ完全に治つてないだのうー...安静に」とかんと…」

のうしのうしとコナンを追いかける博士。その姿はどうみても老人

にしか見えないのがなんとも氣の毒な話なのだが、彼は「いつ見えてまだ50代なのだから驚きである。

コナンはそんな博士を見て、思わず噴き出す。

「ふつ…くくく…」

博士はせっかく心配しているのに笑いだすコナンを見て、少し不機嫌な顔になる。

「な、何がおかしいんじゃ、新一…」

「わ、わりいわりい…必死すぎる博士見たら何か笑えてきてよ…。まつ、大丈夫だから。それより蘭が心配すっから今日は帰るよ。灰原に礼言つといてくれよ。じゃあな！」

「コナンはもう去り博士の家をあとにした。博士はやれやれといった表情でコナンの後ろ姿を見つめていた。

* * *

「ただいまーっ！」

コナンは探偵事務所のドアを開けると勢いよく挨拶した。

が、そこにいたのは小五郎だけで、蘭の姿がどこにもなかった。

「よお坊主。蘭なら今はいねえぞ。空手の練習に行っているつよー」

「あ、そりなんだ」

コナンはそう返事をすると、いったんドアを閉め、自宅の方へとあがっていく。荷物から洗濯物を出し、洗濯機へと放り込み、その他の荷物は小五郎兼自分の寝室へと片付けた。

そして適当に推理小説を手に取つて、また事務所の方へと向かつた。ドアを開けるとイヤホンを耳に押し込み、新聞と必死に睨み合いをしている小五郎の姿があつてコナンは苦笑した。

「（ハハ…また競馬かよ）」

内心そう思いながらコナンは持つてきた小説をソファの上で仰向きになりながら読み始める。

実は途中だつたこの本。今まで体調が悪かつたせいでろくに読めなかつたが、今なら読めると思ってコナンはわくわくしながら読み始めたところだつた。

久しぶりの穏やかな時間。こんな日がずっと続けばいいのだと、コナンは願つた。

07 (後書き)

感想やメモセありがとうござまく (*、 *、 *)
次回もお楽しみに

08（前書き）

そういうえば来月にいよいよ去年の映画、「沈黙の15分」のDVDとBDが発売されますね！

あ、それと12月には4枚目の主題歌アルバムも出るそうです(*'・'*)

もちろん私は2つとも初回限定版をゲットしますよーwww

てなわけでお知らせ兼前書きでした（笑）

コナンが探偵事務所に戻つて数時間後、袞はコナンの様子を見ようと地下室から出てきた。

「ねえ、博士。工藤くんは？」

博士は若干気まずそうに答える。

「まさか、帰っちゃったのー?」

「それがその……蘭くんが心配するから」と言つて、事務所に……

哀は博士の言つゝとを先読みし、問い合わせる。

「あ、ああ…まあ、出て行つたときはすっかり体調も良くなつていいよ」
うじやし…」

「何呑気なこと言つてゐるのーあの症状を見て、博士は何とも思わなかつたのー?早く彼を連れ戻さないと今度こそ蘭さんに言い訳できなくなるわー」

博士はあまつの哀の荒てぶりこ、じわめむ。

「哀くん…蘭くんに言い訳できなくなつて、エリコがいなさじや？新一は何かの病気なのか…？」

哀はしじめられ考え込んだ末、博士にだけは呟きと細つた。

「博士、上藤君は…」そのまま放つておこたら、確實に死んでしまつ
の」

「……な、なんじゅともつー?」

阿笠邸に、博士の悲鳴が響いた。

* * *

「…あれ？」

パンは皿を下すた。

「…え？」

何度も何度もひさつた。

けれど。

「まじかよ。やべ…」

先ほどまで何の問題もなく読んでいた推理小説の文字が今、どうし
ょうもなく歪んで見える。

「（…蘭が帰つて来る前に博士んちに行かねーと…）」

そつとえて立ち上がった瞬間、外から足音が聞こえてきて、

「ただいまー。あ、コナンくん一帰つてたのね」

空手の練習を終えた蘭が、買い物袋をたくさん抱えて帰ってきた。

「あ、…おかえり。蘭姉ちゃん…」

「ひしてコナンの長い夜が、始まつた。」

＊＊＊

「私のせいでも、工藤くんを死なせるわけにはいかないの。博士、探偵事務所に電話して。工藤くんを連れ戻して」

「哀くんのせいで…そんなに自分を責めるでない。第一蘭くんだつて不自然がるじゃろう?一度は帰ってきたコナンくんがまたワシの家に行くなんて。どう説明するつもりなんじゃ?」

哀は博士に全てを話した。

博士は話を聞いたときは酷く驚いたが、自分が冷静でいなければと氣を奮い立たせた。

哀の言っていることが本当ならば、一刻も早く蘭とコナンを引き離さなければ、コナンの正体も副作用のことも、全てが明るみに出ることになる。そうなれば組織に居場所が知られ、周りの人間にも危害が及ぶ。

そして、コナンがいざれいなくなってしまうかもしれないという事実に、蘭が耐えるれる保障はどこにもない。

「蘭さんこま悪いけど、言い訳なんて考えてられないわ」

哀はそつとパークーを羽織ると、外に飛び出した。

「あ、哀くん！待ちなさい、哀くん！」

博士も続いて哀を追いかけた。

阿笠邸の壙の上で、2羽の鳥がその光景を眺めては不気味に佇んでいた。

わて、こわごと車が動き出しましたよ（笑）
これからもどうぞ楽しみにしてください

ちなみに前書きで書いたやつの発売日なんですが、
DVD・BDは1・1月23日、CDは1・2月1・4日だそうです（＊
＊）

ちなみにこの初回限定版にはDVDもついてるらしいのでも私は予
約するつもりですつ　ww

09（前書き）

次回から前書きは省きます

えーっと、宣伝で申し訳ないのですが、
友達が二次小説のサイトを立ち上げたので
お知らせしますw w

mixi内の機能らしいのですが、
mixiをしていない人でも見れるみたいなので
ぜひ見てやってください(*、*、*)

http://page.mixi.jp/view_page.php?page_id=173836

あ、このページにはすでに
いくつか小説が紹介されているので
もしも自分の小説が載つてて、
それを見て不快な思いをした方がいれば
私に連絡ください！
私から友達に消してもらうことがありますのでへへ
あ、逆に載せてほしい方も
私に言ってください^ ^ w
ではでは本文へどうぞ~

哀は走った。

いつの間にか空は灰色に覆われていて、今にも雨が降り出しそうだ。

ふと後ろを振り返ってみると、博士が汗だくなつて追いかけてくるのが見えた。

けれど、申し訳ないが止まる気はない。

今、自分がしなければいけないこと、それは彼の元へ辿りつけることだから。

哀が必死になつて走っていると、やはり雨が降ってきた。

最初は小雨だったのが、段々と本格的に降り出すよになつて、アスファルトがどんどん濡れしていく。

走る度に水たまりが弾け、哀の足元を濡らしていった。

「 もちろん… 」

水たまりに足が入った瞬間滑り、派手に転んだ。

地面上に強く膝を打ち付けたようで、ついつらすらと血も滲んでいた。

哀はその傷を眺めながら切ない表情を浮かべる。

「 まるで、あの日に戻ったみたいね… 」

思い出したくない記憶が蘇ってきて。

組織から抜け出したあの日。

鳥が気付く前に、追つて来る前に…

逃げて、逃げて、転んでもまた立ちあがって。

必死になつて走つた、あの時のよつで。

ふつと微笑み、立ち上がろうとした刹那、背筋が凍る感覚がした。

恐怖で震える身体をひしと抱きしめながらそつと振り返ると、歯をむき出してせせら笑う鳥が一人。

「逢いたかつたぜ、シェリー…」

風でなびく銀髪が、やけに綺麗に見えた。

「ジン…つーー！」

涙目でその男をじっかりと見据えた。

「何言つてゐる。もう夜なんだから、明日でもいいでしょー。」

「ナンは何とかこの場から離れようと必死に言い訳を並べていた。
だが、世話好きかつ心配性の蘭は、それを許さなかつた。

「蘭姉ちゃん…、僕、博士ん家に忘れ物…」

* * *

「で、でも…今日、今から必要なものなんだっ…」

「うつしてゐ今も、着々と発作の兆しが見え始めている。

田は先ほどよりも震んでいて、うつすらと額から汗がにじんでいる。

指先が小刻みに震え、息が苦しくて無意識に胸をおさえた。

そしてコナンのやうな浪漫な動きを見て、蘭は気づいてしまった。

「あれ? コナンくん、ちょっと黙つて…」

びくつと反応したコナンの額に、そっと触れる蘭。

「ナンは内心諦めた。

その心の緩みによつて、張つていた氣も緩み、一瞬頭が真つ白にな
る。

「ナンの額の熱さに圧倒された蘭は、ナンに声を掛けよつとした。
だが、そのときナンの身体が大きく揺れ、重心が後ろに持つて行
かれた様子のナン。

蘭はすばやく両腕でしっかりと受け止め、そのまま抱き寄せた。

ぐつたりと体重を預かるナンに、蘭はやめとつかない。

「う、ナンへんへん…。」

田は虚ろで、息は荒く、額から汗が噴き出していた。

「ナンへんへん…。」

悲鳴のような蘭の声を、薄れゆく意識の奥で聞きながら、ナンは
そのまま闇に落ちていった。

09 (後書き)

「おこのみ」を描くのはとても楽しげです、はいwww

これからどんどんはあはあしていく江戸川が厭れると思っていますよ(*'▽'*)

楽しみにしてねっ♪ べべべ

ではまた次話で会いましょう～*

次話から前書きは省きます

「コナンくん……」

意識を手放したコナンはぐつたりと蘭に体重を預けた。

蘭はそんなコナンを素早く寝室に運び布団に寝かせると、まず体温計をコナンの脇に挟み込み、優しく布団をかけた。

「大丈夫よ、コナンくん…すぐに楽にしてあげるからー。」

勢いよく寝室を出て台所に向かい、洗面器に水を張る。同時にタオルを濡らして適度に水を含んだまま絞る。

タオルと水が並々に入つた洗面器を持つて、再び寝室へ上がると、
ナンの元へ駆け寄つた。

「コナンくん…す」い熱じゃないつ」

真っ先に体温計に手をやると、セイジは39.8といつ数字が並んでいた。

冷たい水を含んだタオルをコナンの額に乗せ、その他にも脇の下や股関節など動脈が通っている部位に次々と冷たいタオルを挟み込み応急処置を施す蘭。

その処置は以前、蘭が熱を出したときにコナンが行ったものだつた。

動脈や静脈など大きな血管が通っている部位を冷やすことにより、冷やされた血液が全身に回り体温を効率よく下げることができる。である。

こうして出来る範囲で全ての応急処置を終えた蘭は、コナンの手を握り寄り添つた。

「コナンくん……、どうして無理するのよ。辛いなら辛いって言えば、こんなに酷い風邪にならなくて済んだのに」

そう呟いた瞬間、コナンの胸が大きく動いた。

「… つぐふ」

息を吸い込んだ瞬間、気管が詰まつたのか口ナシは苦しかつて詰まつた。

「口ナシへどー。」

「ひ……せ、ぬ……つぶ」

「ひつかつしてひ、口ナシへどー。」

胸をあわせつと押おさえる口ナシをゆりべつと起しつつて胸中を呂いた。

「……つがは、ふ……ゲホッ、ゴホッ、ゲホッ……」

ようやく気管を塞いでいた妙な感覚が取れ、欲していた酸素を勢いよく吸い込むと、それと同時に排出された空氣との摩擦により激しく咳き込んだ。

時折嗚咽も漏れ、吐き気も相当あるよつて氣持り悪さに顔をしかめるコナン。

そんなコナンを見て蘭はただただ動搖を隠せずにいた。

* * *

狭い路地に、小さな女の子と黒服に身を包んだ銀髪の男が佇んでいた。男を「ジン」と呼んだ少女は完全に追い込まれていた。男の手には拳銃が握られており、反発など許されない。

哀は震える身体を必死に抑え、平常を装つ。

「そんな怯えた瞳をするなよ、シヒリー…。お前らしくないな…」

「あら、私がそんなに弱々しい女だと思つていいの?別に怖がつているわけじゃないのに。…歓迎して、くれるのよね?」

「ああ。お前次第だがな」

そう言った後、引き金に指を掛けたジン。

「ああ、来い。あのお金をお待ちだ」

今ここで逃げようとするならば、確実に撃たれる。だが組織の研究室に戻ることができたらアポトキシンを持ち出すことができ、その成分を正確に読み取ることができたなら、「ナンを救う特効薬を作ることができるかもしねい。

そう確信した哀は、ジンに言われるままポルシェに乗り込んだ。

「（一藤くん…待つてて、必ず助けるから）」

今回もお読みいただきありがとうございました

「ニーヤと哀が別々の場所で

何やら大変なことになってしまったw

書いてる私も

かなり楽しんじゃつててます (*、*、*) w w

読者のみなさまも

楽しんでいただけてますでしょつか?

それではまた来週会いましょう! (*、*、*)

博士はいつの間にか哀の姿を見失ってしまった。辺りをキヨロキヨロと見回してみてもどこにも見えない。

胸がざわざわして、胃も痛くなる。嫌な予感がしてならなかつた。

「あ、哀くん……いつたいどこに行つたんじや……」

博士は哀が走つていつた理由を思い出し、探偵事務所までの道をくまなく探すことになった。

すると、三つ先の角に小さな人影を見つけた。

「哀くんっ！」

博士はほっと安心して、駆け寄りうつしたとき、哀の姿が消えた。慌てて走り出し、哀が居た角に到着した博士が見たものは、燃費の悪そうな真黒な車に乗り込む哀の姿だった。

「あ…っ」

あまりの衝撃に上手く声が出ず、情けなく震える吐息に似た声を発した瞬間、その車のドアはパタンと閉まり、そのまま発進してしまった。

「あ、あれは…、ポルシェ356Aつー…あ、あ…哀くんつー…！」

しん、と静まり返ったその場に、博士の悲痛な叫びが響いた。

「コナンくん…」

その頃、探偵事務所ではコナンの背中を必死になつて摩る蘭の姿があつた。

* * *

コナンは胸を強くおさえて、激しく咳込んでいた。

気管から分泌された痰が「ロロロ」と音を立て、呼吸を妨げる。どれだけ咳をしても、嗚咽がこぼれようとも、一向に痰が切れる様子はない。

「げほっげほー」ほつ…「ひ

コナンは胃からこみ上げてくるものを必死に飲み込もうとする。だが咳によってその行為も妨げられ、ついには嘔吐までしてしまった。

「コナンくん…っーだ、大丈夫…、我慢しないでっーこれ…」元気に出して

蘭はビニール袋を取り出し、コナンの口元に持つていった。同時に背中を何度も叩いて呼吸を促す。

「落ち着いて……、ゆっくり深呼吸して下さい」

「ナンは蘭の言つ通り、ゆっくり息を吸つた。ナンの『お籠』留まる痰は「口」「口」と蘭の耳に聞こえたので立てる。ナンは息を吐く。またも痰は音を立てた。

「「ナシベニ、まだ苦しこね……」

蘭の言葉を意味のある言葉として認識できていこない様子のナン。

虚ろな目で蘭を見上げ、ふわりと笑つた。

その途端、また激しい咳が再発し、嗚咽と嘔吐を繰り返す。

見かねた蘭は、携帯で救急車を呼んだ。

「コナンくん、今救急車呼んだからねーすぐ楽になるから…」

すると事務所の方からバタバタと慌てて小五郎が入ってきた。

「おい蘭つ…救急車つて…坊主どうしがまつたんだつ

「わからないいつ…でも、咳が止まらないの…つーさつき畠山までしちやつたし、胸だつておさえて…。私つ…コナンくんがこんなに苦しんでるのに、何もできなー…つ

そつ言つ蘭の目からは不安と恐怖と困惑が入り混じつた涙が溢れた。
小五郎はそんな蘭を見て、乱暴に蘭の肩を揺さぶる。

「じつかつしゅうひー今一番泣きてるのはお前じゃなくて、こいつだ
わー」

その言葉にはっと息をのんだ。そしてゆっくりコナンを見る。肩ではあはあと息をして、苦しそうに胸をおさえるコナンの姿にまた泣き声になる。が、小五郎の言葉を受け止め零れた涙を拭い、優しくコナンの背中をさすった。

そのとき、救急車のサイレンが聞こえてきた。
蘭はコナンを両腕で抱え、急いで外に出た。

やがてやってきた救急隊員にコナンの症状を伝えると、救急車に乗り込み、コナンをストレッチャーに乗せたあと隊員たちはコナンに応急処置を施す。

まず聴診器で胸の音を聞いた隊員は顔をしかめ、近くの隊員たちと「ごやじごそ」と言葉を交わす。

そしておもむろに棚を探り、中から細い管を取りだした。

コナンに口を大きく開けるよう指示をすると、隊員はその管をコナンの口腔に挿管した。

気管の奥へと進む管の刺激のせいで激しく嗚咽をもたらすコナンに対し優しく声を掛ける隊員たち。蘭も便乗して声を掛けながら、小刻みに震えるコナンの小さな手を包み込むように優しく握った。

気管にまで到達した管からは、コナンを苦しめていた痰が吸引され、全て排出された。

役目を終えた管はするするとコナンの口腔から出され、再び隊員は聴診器で胸の音を聞いた。

「よし、もう大丈夫だ。よく頑張ったな、坊主！」

そう言って、汗でべたついたコナンの頭をがしがしと撫でた。

熱のせいで朦朧とした意識の奥で、コナンは胸の不快感が取り除かれたことに安心し、静かに目を閉じた。

11(後書き)

前にも一度言いましたが、
私医療については少し詳しいんで
これから結構そういう場面が増えると思います。
治療のシーンだつたり。

そういうの苦手な人もいると思つて

15禁に設定したんですよ(、'、；、)

なので苦手な人は自己責任でお願いします。

ではまた次回でお会いしましょ、

来週は私情のため投稿をお休みします。

2週間後の土曜日には投稿できると思いますので、
ご了承ください。^ ^

ココハ、ドコ…？

真ツ暗テ、何モ見エナイヨ…

ボクハ誰ナノ？

「だ…め、コナ…く…」

聞コエナイヨ。

貴女ハ、誰？

モウ、何モ聞コエナイ、見エナイ。

…ゴメンネ。

* * *

「ナン…ん、…ん…、コナンくんっ！」

額に汗で濡れた髪の毛がべつたりと張り付く気持ちの悪い感覚と、普段聞き慣れた優しい女性の声によつて、ゆっくりと覚醒されていく意識。

コナンは身体の熱さとだるさに顔をしかめながら徐々に目を開いた。

「あ、コナンくん！ 目が覚めたのね！ 大丈夫…？」

「う、ん…？」

朦朧とする意識の中で、声がする方へと必死に手を伸ばした。

「コナンくん、私は…心配しないで、ずっとやばいから…」

そう言って蘭は、小刻みに震えるコナンの手をしっかりと握つて応えた。

コナンはあれから救急車で意識を失い、病院に着くなり車内では行えなかつた様々な応急処置をされた。

呼吸困難に伴う酸素濃度の低下が見られたため口元には酸素マスク、指には酸素濃度を測る特別な機械、解熱剤と抗生物質の点滴、心電図…。

また、40度を超える高熱のため、頭と脇の下、股関節など動脈が

通の個所に氷を挟み、その横では蘭が必死に看病を行っていた。

「コナンくん、どうか苦しいことない？」

優しく問い合わせて、コナンはゆっくりと口を開く。

「あ、少し頭が痛いけど…大丈夫だよ」

そう言ひてコナンは点滴されていない方の手で頭をおもえた。

「さう…。あ、じゃあお医者さん呼んでくるねー。」

蘭は病室の扉をゆっくり開け、ぱたぱたと走っていった。

「ひ……」

頭痛が、段々と酷くなつていぐ。

またあの発作がくるのか。コナンは確信し、どうにか落ち着かせようとしてゆっくり深呼吸してみたが、コナンの意識とは裏腹にどんどん症状が出てきた。

「へそ……熱が上がつてきやがつた……っ」

片腕で額を覆つてみたが、先ほど皿を覚ましたときに比べると明らかに体温が上がっているのが分かつた。

そうなると次に来る症状は……

「へあ……っ」

予想通り、コナンは胸をおさえながら苦笑した。

蘭が医者を呼びに行つたのが幸いだつたが、もし発作が治まる前に戻つてしまつたら、厄介なことになる。

コナンは点滴の針を無理矢理抜き、心電図と指の機械を外して病室を後にした。

とりあえずその場凌ぎにしかならないが、トイレに向かつ。個室のトイレに入つて、鍵を閉めた途端、さつきまでいた病室から蘭の慌てた声が聞こえてきた。

「あつぶねー。間一髪…」

胸の痛みが取れるまで、ここで大人しくしていよう。

そう思った瞬間、またどくんっと波撃つような動機が襲つてくる。立つていられなくなつたコナンは崩れるようにしてその場にしゃがみ込んだ。

* * *

一方その頃博士は、哀が連れ去られた現場で茫然としていた。

「し、新一に連絡しないと……」

やっと我を取り戻した博士は携帯電話をポケットから取り出し、口
ナンの携帯に掛けた。

数回の「ホール音」がして、すぐに留守電に切り替わる。

「何をやつてゐるこいつ……」「なんとか……」「アホだ……」

焦りからか指がどうしようもなく震える。仕方なく毛利探偵事務所の方へも連絡を入れたが、結果は同じだった。

「困ったの…哀れんなわしあざついたらいここんじやつ…」

すると通りの向いから、小さな女の子の姿が見えた。
女の子は博士の姿を見つけると、大きく手を振りながらへ走ってきた。

「はーかーせーつー

「あ、歩美くん…っ」

歩美は買い物の帰りなのか、袋を両手に持っていた。

「どうしたの、博士。 なんだ」「うう

歩美の問いにどう答えるか迷っていたら、探偵団バッジが田にとまつた。

「あ、歩美くん…ちょっとの間だけバッジを貸してくれんかのう？」

「え、うん。いいよー…はー…」

そう言って歩美は博士に自分のバッジを手渡した。
博士は受け取ると田の方へと走っていった。

12 (後書き)

お待たせしました！

先週は大学の学園祭があつたため
御休みさせていただきましたが、

本日は無事に投稿することができました(*・、・*)

博士が走っていますw

どうするのか大体予想はつきますか？w
なにはともあれ

次回もお楽しみにしていてくださいねつ (*・、・*)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0447x/>

love song -あいのうた-

2011年11月20日05時38分発行